

3月定例校園長会にて

皆さん、こんにちは。

■はじめに

3月に入り卒業式の季節をむかえました。それぞれの学校園では、一年の締めくくりをお願いします。

■修二会の教員研修^(注1)と世界遺産学習について

「奈良の本物と出会って、奈良のよさを感じてほしい。奈良のよさに触れ、自分の言葉で子どもたちに伝えてほしい。」という思いから、奈良市の教員が修二会を見学する研修を始めています。今年で4年目を迎えました。初年度に参加した元校長先生から、当時、次のような手紙をいただきました。



研修に参加する前も、奈良に生まれ、奈良で育ったことを誇りに思い、自分の体験を子どもたちにも話し、話題を共有してきましたが、修二会については、おたいまつしか見たことがありませんでした。研修に参加し、修行の場を実際に見たことで写真や書物では味わえない本物に触れることができ、感動を話せます。ぜひ、続けてほしいです。

私たちの周りには、当たり前のようにあるけれども、一見しただけではわからない「深さ」や、言葉にできない「奥行き」があるものがたくさんあります。奈良のよさを伝えることは、なかなか難しいことですが、見学する度に今まで気づかなかった側面が見え、体験する度に違った印象が感じられ、調べる度に新たな発見があります。だからこそ、本物に出会ってほしいと願っています。

この研修は、管理職対象に始めましたが、少しずつ参加の枠を広げ、4年間で延べ459人の教員が参加しました。参加した教員は、ぜひ本物に触れた感動を多くの仲間や子どもたちに自分の言葉で伝え、「奈良の本当のよさ」に出会う新しい実践を生み出す原動力にしてほしいと思います。

奈良市が推進している世界遺産学習は、「奈良にある素晴らしいものに対する誇り」と、「それを守り受け継いできた人々の営みに対する誇り」、そして「それを深く学ぶ自分に対する誇り」を育てる教育です。平成22年度まで世界遺産学習推進委員をされており、前NHK奈良放送局・放送部長である武中千里（たけなか・ちさと）さんは、「今までは、経済的な発達による豊かさというものが幸せであると思われていましたが、これからは人間の満足度が幸福感をあげるようになっていくと思っています。世界遺産学習は、幸福感をあげるとても大切な事業だと思っています。」と奈良市の世界遺産学習を評価してくださり、東京に転勤された今でもこの取組を応援してくださっています。世界遺産学習を教育の中核に据え、奈良で学んだことを誇らしげに語れる子の育成をお願いします。

■地域との連携について

よく教員は、「うちの学校」「うちの生徒」という言い方をします。それは、自分が勤めている学校に愛着を持っている証拠であり、自分のクラスの生徒を、わが子のように大切に考えている証拠でもあります。学校に対する愛着、子どもたちに対する責任感の表れともいえます。しかし、教員は、長くても10年で学校を離れていきます。一方、保護者や地域の方々にとっては、親から子、子から孫へとつながっていくのが学校です。学校がこのことを意識しながら、地域との連携を深めていくことが大切です。

子どもや学校が本当に窮地にさらされた時、それを救ってくれるのは、保護者や地域の方です。昨年、「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」^(注2)に参加したある学校の地域コーディネーターが、次のように話されたのが印象的でした。

このプロジェクトを受けるときは、どのように子どもを動かせばよいか分からず困惑したけれども、今日の子どもたちの姿は、確かに成長した。子どもが変わったことが実感できた。

子どもが成長した姿を見て、それに触発されるようにして地域の人も「ボランティアをしてよかった。」「学校のために頑張ろう。」と変わっていき、学校や子どものために何かできることはないかという気持ちになるのだらうと思います。そして、それが、「自分たちが学校を支えている。」「学校に責任をもって関わっているんだ。」という自信や誇りにつながっていくのだと思います。

別のコーディネーターは、次のように話されています。

毎年自治連合会で主催している自主防災のイベントを、今年は中学生の力を借りて実施をしたところ、当日はとてにぎやかな取組となり、大成功で終わった。地域の行事に中学生が参加するだけでも大変嬉しかったが、その後、学校から「次に、何か子どもたちができることはないですか。」と聞かれ、心の底から学校や子どもたちに関わってきてよかったと思った。

このような言葉は、学校が地域と連携した取組を進めてきたからこそ出た言葉ではないでしょうか。

また、先日行われた、「防災生徒総会」^(注3)では、子どもたちの発表や取組を見た地域の方から、「中学生の頑張っている姿に感動しました。私たち地域の大人も負けていたらだめだなと実感した。」「中学生がパネルディスカッションで話す一言一言が、今の社会も見習わなくてはいけないと思う。“教育”の大切さを実感した。とてもよかったです。」という感想をいただきました。参加した子どもも、「地域との連携って大切だなと思いました。自分のできる事を自分から進んでやっていきたいです。」という感想を残しており、この防災生徒総会を講評していただいた文部科学省



平成 25 年 2 月 9 日

はぐくみセンターで行われた防災生徒総会での
パネルディスカッションの様子

防災推進室 室長補佐の廣田貢（ひろた・みつぐ）さんは、「子どもが発表の中で、『地域の人と一緒に・・・』とか『地域のためにできること・・・』など、何回も『地域』という言葉を使っていた。子どもが、これほど『地域』を意識している市町村は、他にない。」と、お話をいただきました。

学校と地域の連携を強める取組については、平成20年度に、すべての中学校区で学校支援地域本部事業を実施し、平成22年度からは、「地域で決める学校予算」を活用しながら進めてきました。それが、やっとここまで来たのか、という感があります。しかし、「たどり来て、未だ山麓」という言葉があるようにまだ学校と地域の連携は始まったばかりです。今、取り組んでいることが、交流に始まり、イベントに終わっていないだろうか。イベントをこなしていくことで、「地域連携ができています。」と言っていないだろうか。本当に「開かれた学校」とは、どんな学校なのか。自問しながら、来年度も皆さんと一緒に考え、山の頂をめざして、一步一步進んでいきたいと思えます。

■おわりに

今日は、1年間の締めくくりとして、教育ビジョンの基本目標1「奈良らしい教育の推進」と基本目標5「地域全体で子どもたちを守り育てる体制づくりの推進」に絞って話をしました。1年間を通して振り返ってみると、毎月その時々課題とともに、教育ビジョンの5つの基本目標（注4）に沿って、話をしてきました。今年度は、残り1カ月を切りましたが、5つの基本目標に示されている教育の推進を、最後までよろしくお願いします。

最後になりますが、今年度でご退職される校園長の皆さん、長い間奈良市の教育にお力添えいただき、本当にありがとうございました。あと残りわずかではございますが、どうぞよろしくお願いします。

（注1）「奈良を深く知る」研修の一環として、平成21年度より修二会の見学を行っている。修二会は一般にはお松明が有名であるが、二月堂の中では練行衆とよばれる11名の僧が十一面観音の前で悔過を行っている。お堂の中で、その様子を見学する。

（注2）文部科学省の事業で、地域コーディネーター人材の育成プログラムと、中学校区における地域資源を活用した「学区ブランド産品」開発プログラムを共同研究として実施した。そのひとつとして、富雄中学校区では「富よりだんご」という団子の制作と販売に取り組んだ。

（注3）文部科学省「学校施設の防災力強化プロジェクト」事業の中の取組のひとつ

学校施設の防災力強化を目指して、市内のモデル校4校の生徒代表と教師が仙台市の中学校を視察。東日本大震災時における中学校の現状と中学校の役割について意見交流しながら、学校施設における防災力について学習した。その後、各校で学校施設の防災力を点検・強化し、成果を「防災生徒総会」で発表した。

（注4）

奈良市教育ビジョン	基本目標
1	奈良らしい教育の推進
2	豊かな心とたくましい体をはぐくむ教育の推進
3	確かな学力をはぐくむ教育の推進
4	信頼される学校づくりの推進
5	地域全体で子どもたちを守り育てる体制づくりの推進